

# 昭和戦前期の甲府製糸業の構造と特質

—座談会「甲府における繭糸業の歩み」より—

齋 藤 康 彦

## はじめに

明治～昭和期を通じて、山梨県は岐阜、長野、埼玉、群馬などの東山養蚕諸県と同様に養蚕・製糸業が著しく展開・発展した県であり、甲府は明治初年以来県内における製糸業の中心地の一つでもあった。

また、日本の産業史にとつても大きな意味を持つ明治一九年（一八八六）の雨宮製糸場の女工ストライキの存在も忘れるることはできない。これらのことから甲府市史近・現代専門部会も近代における甲府市の産業経済の移り変わりを跡付けていくうえで製糸業は重要な柱の一つを構成すると考えている。<sup>(1)</sup>だが、山梨県の製糸業の展開過程について検討を行なった先行研究の多くは、主として明治期の製糸業を対象とするものであって昭和戦前期の動向にまで検討を加えたものは意外に少ない。<sup>(2)</sup>しかし、昭和戦前期段階における甲府市の製糸業のもつ諸特質は、これまでなされた明治期の検討によつて析出された諸特質の单なる延長とは考えられず、また、先行研究が採用している器械製糸と座縫製糸の「類型」<sup>(3)</sup>、あるいは中小零細

工場と大規模工場との対抗関係の存在の指摘だけでは充分に把握できない側面を持つているなど、さらに解説すべき課題は数多く存在する。

本稿は、それらの課題を考えていく手掛かりを得る目的で、甲府市史編さん委員会近・現代専門部会が、一九八七年七月一八日に実施した座談会「甲府における繭糸業の歩み」の多岐に亘る内容を、昭和戦前期の甲府市の製糸業の持つ構造およびその特質の一端を明らかにすることをテーマに筆者の責任でとりまとめたものである。従つて、発言は忠実に再現したが、前後の省略、発言順序の変更など若干の再構成を行なっている点は予め断わっておきたい。

（昭和初年）当時は四〇〇名の芸者衆がいました若松町には、今のように観光とか騒がない時代にどうしてそれだけの芸者衆が流れれたかというと、それはもう製糸屋さんと建設業者、県庁とか市役所、銀行は別にして、とにかく製糸屋さんと建設業者で花柳界はもつっていました。浜糸（相場）が上がると製糸屋さんはもう全

部芸者衆を揚げてくれました：佐渡町の丸三商会は飲みながら商

談、昼から呼ばれました。宵越しの金は持たない気風、遊びはきれいで製糸屋にはあかぬけした紳人が多かった。矢島栄助さん、三日町の細田さん、若尾義角さん：（中塚美佐子氏談）

あれでしきうね美佐子さん、昔の製糸屋のお旦那は、お旦那らしかつたね。宴会の際芸者さんが来るなんて時は、縫い紋の紋付だからね。夕飯食べに行くときは紋付ですよ。洋服で飯食いに行つたら笑われたね。（三井金三氏談）

製糸屋でなければ人でなかった。若松町あたりでは：（中沢保男氏談）

座談会の出席者達は「全盛」であった頃の製糸業者の羽振りの良さをこのように表現している。

製糸業が昭和戦前期の甲府市の産業経済を支える重要な柱の一つであったことは改めて言う必要はない。事実、例えば、大正一四年（一九二五）の甲府市の産業部門別生産価額構成によれば、全生産額の九七・二パーセントを占める工業部門生産額の実に八六・四パーセントは生糸である。<sup>(6)</sup> 言換えれば、甲府市における全産業の生産額の八割以上は生糸が占めているということになる。しかもこの産業部門別生産価額構成表では捉えることのできない商業部門も、例えば、繭市場、生糸問屋など製糸業と深く関連する業種が多く存在し、前掲の発言が少しも誇張でないといつてよい。

勿論、甲府市の製糸業も決して一本調子で発展を遂げてきたものではないことは言うまでもない。製糸業は一般に「生死業」とも別称されるようにその内部では激しい浮き沈みが繰り返えされていた

のである。

大正一一～一三年の数値が欠けているために必ずしも正確なものではないが、大正期以降の甲府市の製糸業の推移<sup>②</sup>を示した第一表によれば工場数、製造高、販売価額のどの指標をとっても大きく増減の波を打っていることを看取できる。特に座縁製糸の場合の増減の巾が目を引く。即ち、明治末年に襲った不況の影響と考えられるが、大正初年には僅かの四九戸を数えるのみで、しかも年を追つて減少すらしていた座縁製糸の製造戸数が、第一次世界大戦を契機とする「生糸ブーム」を背景として大正六年には一挙に一〇二戸へ僅か二年で四〇倍に急増した。その後、昭和初年までの一〇年間は製造戸数はほぼ一〇〇戸水準で推移するが、昭和五年の所謂、昭和恐慌で再び減り始め七～八年で最盛期の半分近くにまで減少してしまうち急増減を繰り返す。これに対して器械糸工場は座縁糸に見られるような工場数の激的な増減は見られないが、やはり昭和五年を境に減少傾向をたどつていくことを見る事ができる。さらに製造高、販売価額の推移をも見ておきたい。器械製糸の製造高は年によつて増減はあるが、大正期を通じてほぼ三～四万貫台で推移したが、大正末年に至り一挙に倍増し、不況が始まつた昭和五年以降生産量は急増を続け、僅か数年でさらに倍増し昭和九年の生産量は二〇〇万貫台に達し工場数の推移とかなり異なった動きを示している。しかし、販売価額は基本的に糸価の乱高下によるが、昭和四年の一〇〇〇万円をピーク、同九年の六二四万円をボトムとする大きな変動を見せ、必ずしも生糸の生産量と連動した形で増加していない。販売価額で昭和四年の水準を超えるのはやつと昭和一四年になつてからである。このように不況期以後に見られる生糸生産量の急増現

(第1表) 甲府市製糸業の推移

		器械系		座縫糸		玉糸		肩糸	
	戸数	製造高 千貫	価額 万円	戸数	製造高 千貫	価額 万円	戸数	製造高 千貫	価額 万円
大正 1	13	39.5	222.2	49	16.4	71.5	1	0.9	3.0
2	13	37.9	223.6	31	13.2	58.6	1	0.9	2.9
3	13	44.0	207.3	26	1.9	7.5	1	0.9	2.8
4	13	27.0	141.7	26	14.0	61.6	1	0.9	4.0
5	14	31.8	235.5	126	19.8	111.8	1	1.0	4.4
6	17	43.8	382.8	1,021	22.8	159.6	1	1.0	5.5
7	17	45.2	1,021	23.5	176.3	1	1.1	5.9	28.0
8	18	49.6	824.7	1,029	25.9	354.1	2	1.2	16.2
9	20	39.7	675.8	1,029	20.7	279.2	2	1.3	16.8
10	18	45.8	453.3	1,033	23.0	172.5	2	1.1	9.4
14	61	94.8	1,151.6	1,048	27.4	301.0	1	2.3	26.2
昭和 1	61	93.8	955.3	1,045	16.4	147.3	1	2.3	21.5
2	61	97.2	770.3	1,041	20.7	134.6	1	2.3	15.7
3	76	121.6	965.3	1,045	20.9	135.6	1	2.6	17.4
4	97	164.5	1,240.3	960	13.5	79.5	1	3.3	13.2
5	96	202.1	822.8	827	8.7	27.1	1	3.6	10.8
6	95	185.8	638.1	760	10.2	25.6	1	3.0	7.1
7	85	196.1	936.8	747	6.8	19.3	1	3.0	7.4
8	82	186.9	711.8	620	6.2	16.6	1	2.7	6.5
9	80	209.9	624.0	580	11.8	26.2	1	2.7	6.1
10	79	226.6	1,052.5	576	16.6	74.5	1	3.1	8.6
11	79	288.5	1,196.3	* 37	8.8	31.6	1	3.8	10.0
12	70	223.3	1,000.3	668	10.6	36.9	1	2.7	7.9
13	63	231.7	975.2	450	15.6	57.5	1	3.2	10.7
14	62	218.5	1,574.7	568	15.3	113.1	1	3.3	21.0

屑糸の製造高、価額は昭和10年以前は生皮苧のみ、同年以降は生皮苧、屑糸、熨斗糸の合計額である。

\* = 10金未満不明  
『山梨県統計書』より作成

象は製糸業者が糸価の暴落に因る収入の減少を生産量を増やすことでカバーしようとして一層の増産を行なつたためであろうと考えられる。座縫製糸は製造高、販売価額共にその規模は器械製糸のそれを下回るが、大正期を通じて器械製糸との割合はほぼ二対一の水準を維持しその存在は無視、ないし軽視することはできない。この座縫製糸の特徴として製造戸数が急増した大正五年以降、一戸当たりの製造高はそれまでの四〇〇～五〇〇貫から僅かの二〇貫へと激減する事実があり、このことは急増した座縫製糸製造戸数の多くは極零細規模であったことを物語っている。煩雑さを軽減するために具体的な図表は略すが、器械糸と座縫糸の金数が判明する昭和五年以降の数値によれば、器械糸の場合の一工場当たりの金数六〇～七七釜に対して座縫糸のそれは僅か一～一・四釜であつて両者には画然とした差が存在する。言換えれば、座縫製糸は一戸に一台の座縫製糸機を備え生産に従事していたと考えられる。この点は、

(甲府では)出釜と言つて、市内の比較的下層、そう言つてはなんですが、生活が余り潤沢でない家のおかみさん達が家へ機械を据え付けましてね、足踏みの機械ですね、その出釜のおんなしが相当の数になる。横糸を引いていましたね：(三井金三氏談)

という出席者の発言からも裏付けられる。座縫製糸は戦前段階の甲府の下層市民にとって重要な現金収入源としての意味を持つていたのである。甲府市の市民総出で製糸業を支えていたと言つて過言でない。家庭婦人の「家内副業」としての座縫製糸の存在、それに製糸業の好況期にはそれこそ雨後の筈の如く簇生し、不況期には潮の引くように急激に減少してしまうのである。ただ、県全体で見ると昭和初期以降ははつきりと減少傾向を示すが、郡部地域における

座縫製糸製造戸数は大正期を通じてほぼ一万戸規模で推移し甲府市の場合のように急激な増減は見られないものである。それはともかく、甲府市の製糸業においては「出釜」と呼ばれていた座縫製糸がかなりのウエイトを占めていた事実を改めて確認しておきたい。だが、前にも述べたが甲府市の製糸業のも特徴はこの工場形態による器械糸と「家内副業」としての座縫糸という「類型」区分だけでは捉えられない側面を有していたのである。「国用生糸」の存在がこれである。

甲府は特殊な甲斐絹の原料の横糸というものを引いておりましたから、取引はほとんど初狩から大月、それから谷村から南都留に行つておりました。チャミンの原料になつてゐる。週二回市があつた。郡内から客が来てみんな買つた。国用の糸が多く、ほどんど輸出の糸より多かつたんじゃないかと思ひます。北陸、丹後へ行つた。(三井金三氏談)

第二表は農林省蚕糸局の『全国製糸工場調査』から作成したものであるが、昭和初年段階の山梨県における都市別の生産生糸を輸出用と地遣用の「販路」によって区分した構成表である。同表で言う輸出用と地遣用との違いは基本的には生糸織度によって表現される生糸の種類であり、輸出用生糸は一四デニール、地遣用は二二デニールと輸出用のそれより太い生糸であり、原料としての用途が異なっていたのである。第二表からは次の諸点を読み取ることができる。  
① 昭和二年の場合 山梨県全体で生産した生糸三八・六万貫のうち八二・八パーセントは輸出用生糸であつて山梨県全体で見るならば圧倒的に輸出用生糸の生産量が多い。

② しかし、甲府市にかぎつて言えば輸出用生糸と「国用製糸」

(第2表) 郡市別輸出・地遣製糸生産量

(単位 千貫)

	昭和2年			昭和5年		
	輸出用	地遣用	合計	輸出用	地遣用	合計
甲府市	65.8	40.3	106.1	61.8	52.7	114.4
東山梨	63.0	4.9	67.9	72.2	6.6	78.8
西山梨	1.9	1.8	3.7	2.4	6.4	8.8
東八代	23.8	3.1	27.0	17.1	10.0	27.1
西八代	22.5	1.9	24.5	20.6	2.1	22.7
南巨摩	32.1	3.1	35.2	35.0	1.3	36.3
中巨摩	94.3	7.4	101.7	82.1	22.0	104.1
北巨摩	16.2	1.9	18.1	18.2	7.4	25.6
南都留		1.3	1.3			
北都留		0.7	0.7			
合計	319.8	66.5	386.3	309.4	108.4	417.8

農林省蚕糸局『全国製糸工場調査』(第11、第12次)より作成

とも言われ主に山梨県の郡内地域で広く織られていた「甲斐綱」の原料となつた地遣用生糸の割合は六対四であつて、他の諸郡に比べると地遣用生糸の比重が著しく高く、山梨県の地遣用生糸量の六〇・六パーセントは甲府市で生産されていたのである。

③ 甲府市と同様に地遣用生糸の比率が高いのは甲府市に隣接する西山梨郡と、その生産量では県全体の三パーセントと著しく少ないが「甲斐綱」の生産地帯として知られる南北都留郡であり、郡内地方では地遣用生糸のみが生産されていた。

これらのことから甲府市における製糸業の特質の一つとして地遣用生糸生産の存在が無視できない点を確認できるだろう。しかも、昭和の金解禁、これが打撃となつた。輸出製糸業者がみなつぶれた(原忠三氏談)

びたつと止まつた輸出が、一番打撃を受けたのが最高の生糸を作つていた工場で、アメリカはナイロンを作つちやつた。アメリカが買わんものだから内地のものを作らなくてはならない:(中沢理吉氏談)

と言われるようすに、当時、日本の輸出生糸の八五パーセントを輸入していたアメリカ合衆国での一九二九年一〇月以来の恐慌の深刻化によつて同国向け輸出が伸びないこともあつて、地遣用生糸生産の比重は一層増大する傾向にあつたのである。<sup>(9)</sup>

輸出を専門にやつている製糸家、昭和の初め頃でも(甲府では)何軒もない、比較的大きな製糸屋。その下に北陸向けの国内品をやる製糸屋。さらにその下にもう一つ横糸屋と言つて、出釜と言つて横糸を引く製糸屋、繭と柞を渡して各自が持つて行つて家で糸にして、また夕方持つてくる。おおまかに(甲府の製糸業の内部

(第3表) 製糸工場の設立時期一覧

(昭和5年段階)

	30釜未満	30釜以上	50〃	70〃	100〃	150〃	200〃	300釜以上
明治20年以前					①		①(1)	
20年以後								
25〃								
30〃		1						
35〃					①(2)			
40〃								(1)
大正1〃	1				(1)			
6〃	1	(3)5	(2)2	1	②2	(1)		(1)
11〃	5	(2)5	(1)4			(1)		
昭和1〃	12	5	(1)1	4	(1)			
合計	輸出のみ				1	3		1
	輸出地遣		5	4		4	2	1
	地遣のみ	19	16	7	5	2		2

○印は輸出糸、( )印は輸出と地遣糸、無印は地遣糸のみを生産していることを示す。  
『全国製糸工場調査(第12次)』より作成

は)三段階に分かれていた。(原忠三氏談)

既に器械製糸と座縫製糸という生産形態による「類型」の存在は指摘したが、一般に工場形態によって生産されている器械糸の内部も、工場規模ばかりでなく、明確な「類型」が存在していたのである。以下、器械糸製造工場の内部における構造的特色について検討を加えたい。

第三表は前掲の『全国製糸工場調査』から作成した昭和五年段階の甲府市の製糸工場の規模と設立時期の相関表であり、ここではさらに輸出用と地遣用の製造生糸の種類によつても工場を区分して示してある。同調査は釜数一〇釜以上の製糸「工場」を調査対象とするものであつて、「出釜」と呼ばれた座縫糸は含まれておらず甲府の製糸業の全体像を示していない点は注意を促しておきたいが、同表からは次の諸点を読み取ることができる。

- ① 個々の工場は、度々の休止、廃業を繰り返したと考えられるが、所謂「生糸ブーム」の起きた大正六年以前に設立されていた工場は僅かの一〇工場を数えるのみであり、ここからも製糸業界の浮き沈みの激しさを看取することができる。
- ② 生産する生糸の種類によつて甲府市における製糸工場七二工場を区分すると、輸出糸のみの生産工場五工場、地遣糸のみの生産工場四九工場、両方の生産工場一八工場であつて、工場数から見ても地遣糸生産工場が圧倒的な比重を占めている。
- ③ 各々に区分された工場の特徴は輸出糸生産工場の場合は矢島製糸第二工場の八二釜が最も規模が小さく一般的に規模の大きい工場が多く、設立の時期も明治期であるものが多い。この対極が地遣糸生産工場であり、明治三〇年に設立された善積製糸場を例外とし

て、多くは「生糸ブルーム」が起きた大正六年以降に設立され、所有釜も五〇釜未満が七割を占め比較的小規模工場が多い。この中間に輸出糸と地遺糸の両方を生産する工場が位置する。

以上の点から昭和前期における甲府市の製糸業の特徴は、器械製糸と座織製糸という「類型」だけでなく、器械製糸工場の内部にも矢島製糸を頂点とする輸出糸専門工場と地遺糸専門工場との「類型」の存在を析出できるだろう。

一年間のスケジュール的に言いますとね、六月一二日が市場の取引の始まる最初の日（春繭は）六月一二日から二五日までなんですか、だいたい二週間。それから乾燥して工場が始まるのが一五日から二〇日頃、それが製糸屋の年度始め。それからずつと今度は八月に夏秋蚕、そして晚秋蚕それが九月のお彼岸さんの頃ですよ。（繭が出来るのが）三回なのですよ、昔は。一二月二八、二九日に終り。そして今度は翌年、県のボイラーレ査定がある。その検査が終るまではボイラーレは焚けない。はやいところで一〇日、おそいところで一七、一八日まで正月の休み。よく働いたもんです。それから六月五日から休みに入るのは、それが年間のスケジュールです。六月が年度替りです。（原忠三氏談）

当時の製糸業の年間の生産暦は凡そ原忠三氏の語る通りであつたろうと思われるが、これまでの検討によつて明らかになつた器械製糸工場の内部の矢島製糸を頂点とする輸出糸専門工場と地遺糸専門工場との「類型」あるいは工場の規模の大小などによつて原料、労働力の確保、さらには販路が各々異なり、それ故に原料繭、糸価であるいは景気の変動によつて受ける影響に大きな差が存在したと考えられる。その点については原料繭の購入、労働力の確保の面から出

席者によつて次のように語られている。因に、昭和初年段階では原料繭の購入は大正一二年に甲府佐渡町に設立された丸三甲府繭糸商會で行なわれていたのである。

問屋は春日町の若尾、三日町の細田、新田、広瀬があつた、丸三商會に行つて繭を買い、夕方になるとごはんを食べながら商いをする。（三井金三氏談）

わたしらの子供の時は郡是、鐘紡との取引が多く、一日一台くらいの列車が甲府に向つて走つておつた。養蚕家が市場へ繭を運んできた。天秤棒へ両方ぶら下げてきたとか、荷車で引いてきたとか、少しハイカラなやつはリアカー。佐渡町へはリアカーがいっぱい。そこで皿伏せをしながら取引をした。（中沢保男氏談）

（繭は）養蚕家が持つてくるわけですね。市場はこうなつてしまひた。それをベルトコンベヤーに流しますね真ん中に。そうしますと、お皿、おわんですねそこに値段を書いて投げる。それを見てその最高の人には落すということで市場があつた。（中村英雄氏談）昔はね、繭問屋さんへ県外から繭が委託で入ってきた。昔の生糸問屋は今の銀行と同じでございまして、その繭を、問屋さんへ入つたものを買う。金が無いから問屋さんへ預けておく、それから糸を持つていって繭を持ってきて引く。昔の問屋は金融もやつた。

繭は県内のものもありますが、ほとんど県外から入つて来た総量は多かつた。奥州から九州、しまいには朝鮮からも入つて來た。問屋を通して買つていた。輸出屋は違いますよ。小田切さんたちはお金があるからそういうことはなく自分で買う。（三井金三氏談）私のところは荷為替を付けないんですよ、小田切は。あのころ繭

の買い入れは楽でしたね。俺に買わせろ、何千貫買うちら買わせろと言えども、みんな手を引いて皿を投げれば私の要求する数量が揃った。（小田切彰氏）

ま、なんにしても製糸屋は大変な商売でしたね。そして奥さんの忙しい商売。おやじは相場を相手にやっている。おかみさんが早くから、夜は人が寝てしまうまで苦労する、とにかく大変でしたね。（原忠三氏談）

夕食ぐらいしか顔を合わせないほどの忙しさだった。（中沢保男氏談）

女工さんも輸出、国用、座縫に分かれていた。輸出製糸は専門の募集員が、学校を卒業する時に学校出を募集した。それ以外にも

そのたちは繭の代買いも行つた。主人に代つて養蚕家に行つて繭の買い付けをした。国用製糸の場合には近所の、娘さんも来るけど、だいたいもう結婚したおかみさん連中を集めわけ。三分の一が通い。私のところなんか三分の一が寄宿。あとはみなおかみさん。県内が多かった。（原忠三氏談）

私のところは郡内が多かった。河口湖付近が多くて、大石、長浜、

小立出身者が多かった。暮に各戸に行き契約書を作り、契約手金

を打つた。先金をやつておいて一年契約で、戦前で五円から一〇円くらい。（賃金は）毎月渡さず、暮れに帰る時に持つていった。当時は御坂峠が通れませんでしたから大月から汽車で送りその時まとまた金を渡す、そして来年の契約する。一〇〇円女工がいた。就業時間は長かった。一日一二一四時間。午前五時から午後七時まで働いた。通いの人は提灯を持って送つて行った。（中村英雄氏談）

おかみさんたちは通勤可能なところですから、それでも二キロ歩いてくる人もいました。見番が、かなり年配の人がいるんですけど、それが歩いて人を集めてくる（製糸屋の）おかみさんが、あそこ

は困っているから漬物でも持たせる、お菓子でも子供を持たしてやるとか色々面倒を見なければ人が集まらなかつたのが生糸屋ではなかつたのではないか。（賃金の支払いは）出来高制であり、女工の格付けは手質によって左右された。目方が少なく繭から少ししか糸にできない人はいくらやつても駄目、手質でした。節つてね、糸はスーとなつていなければ駄目でしょう。輸出ではただ、ただみたいな（質の悪い）糸を作つて働いては困る、セーブレン検査があつた。（原忠三氏談）

甲府に多く存在した比較的規模の小さい器械製糸工場の多くは統計上は「工場」とはなつていただが、基本的には工場主の一家総掛かりの労働によつてその経営が辛うじて維持されていた「家業」の水準に留まつていたと考へてよいだろう。従つて規模の小さい器械製糸工場は金融面では特に脆弱性を内蔵し、問屋に従属していたのである。

（細田商店のような）問屋は貸付業務の代行をしておつた。銀行から金を借りてきて自分の傘下の製糸、仲買の連中に金を貸して、その収益が上がれば返済して行く、各製糸（屋）が糸を専門に引いて、それを細田では富士組が共同再縫といつて多くの糸を同じ銘柄の糸に格付けて、糸を一〇俵とか二〇俵とか、まとめて売つた分業になつておりました、当時は。（中沢保男氏談）

製糸屋は問屋に通い帳を出して、それへ繭代がいくらいいくら、糸代金がいくらいいくらと書いて、年末になると利息を付けて金融機

—お招きした方々—

左上より

中沢 理吉氏

中沢 保男氏

三井 金三氏

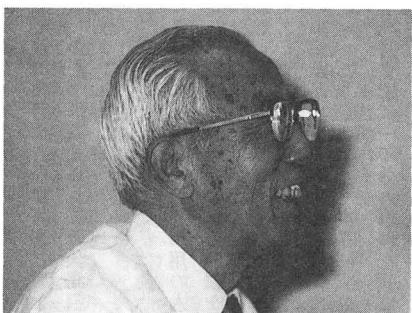
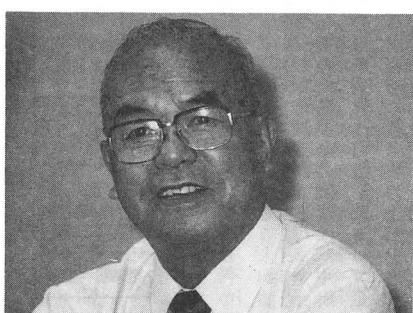
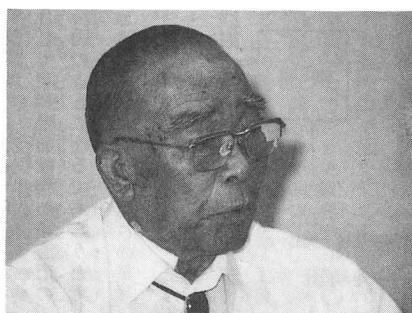
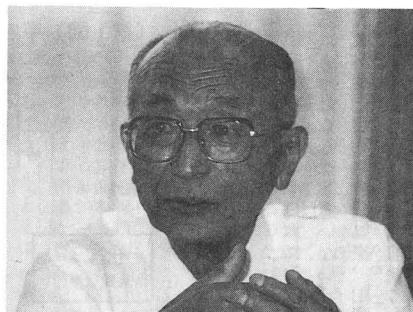
右上より

中村 英雄氏

小田切 彰氏

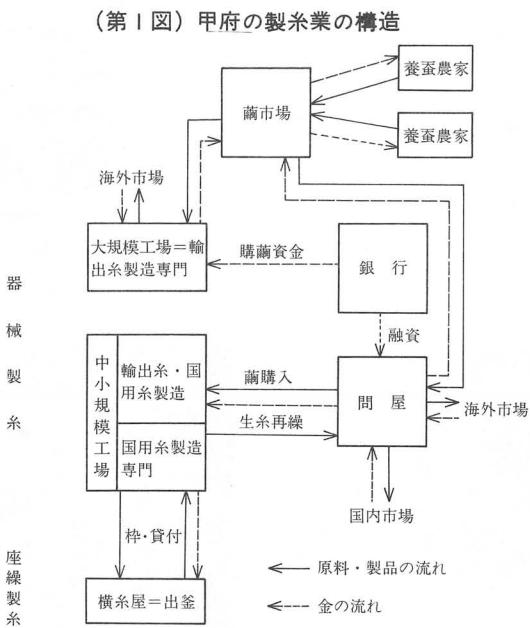
原 忠三氏

中塚美佐子氏



関と同じようにしていました。（中村英雄氏談）

これまでの座談会出席者の話を総合して昭和戦前段階の甲府市の製糸業の構造を図示すればおよそ第一図のようになるであろうと考えられる。



甲府市のみならず日本における製糸業の一つの「転機」は昭和恐慌にあつたことは間違いない。昭和七年の矢島製糸の倒産は、甲府市ばかりでなく明治期以来、山梨県の製糸業界に君臨したトップ企業の倒産であり、昭和戦前期における甲府市の製糸業の趨勢を占う

上で象徴的な出来事であった。「大矢島」と称され、明治四二年段階では片倉組、岡谷製糸、小口組など信州諏訪地方の製糸業者と肩を並べ日本全体で見ても「十大製糸家」の一つに数えられた矢島製糸も基本的に甲府の製糸業の枠内にあつたのである。  
ま、なんだろうね。大きな変化が起きちゃた、情報の大きな変化、誰にも想像できんような変化。大きい人ほどやられた、国用の人はそう大変なことは、矢島がつぶれたのは思惑違いでえらい損をした。在庫を抱えていた。本店と支店を持っていた。相場でしょうね。アメリカの立ち直りを考えていた。あと半年こらえていればもつたかも知れない。上絹糸（の値段が）一円四〇銭、最低であり、もう少しもちこたえれば良かっただ。高い繭を一年間もちこたえていたのに、製糸屋は六から九月までに一年分の原料を買いや込んだ。それから一ヵ年が勝負です。その糸の値が下がるとどうしようもない。矢島は特約（契約）を結んだことが命取りになつた。大きいことが逆にデメリットとなつた。みんな思惑をやつていた。製糸家は工業でなく投機である。（中村英雄氏談）  
昭和六、七年頃、蚕糸業が非常に不景気でございまして、まー私のところの同級生もみんなクビになり、やめていって、私なんかも（甲府）商業の三年の時、財政が続かないということでやめさせようなんて、非常の不況の時でした。母が泣き付いてなんとかしてもらつて卒業した。（中沢保男氏談）

出席者は異口同音に矢島製糸の倒産の原因を「相場」の失敗であると断じている。この「相場」こそ、「生死業」とも別称されるよううにその内部では激しい浮き沈みが繰り返されたにも拘らず出席者から相次いだ、甲府の製糸業が持つたある種の活気、あるいは製糸

業者の羽振りの良さの意味を解くカギが潜んでいるように思われる。

歐州大戦後は景気が良かつた。輸出がどんどん売れたのですから、どんどん相場が上がつてそうしたら満杯になっちゃつて、戦争が終つたら下がつて大正九年一月が天井です。歴史的に言いますと相場が高いから儲かっただ、下がつたから損をしたということはない。工業として堅実にやつているところは相場が上がるが下がるが堅実な経営でやる。そうでないところは相場が上がるとうきゅうして金を摑まえるより使う方が先に行つたということでしょう。生糸相場は繭を沢山仕入れるから糸で売つとか相場で売つとかすれば必ず平均値は取れる。ちょっと良いと繭も買う、それでひと儲けで相場も買うだから駄目。そういうところがばたつといつちやう。たとえば（繭）一六貫が一〇〇〇円だったとする、

繭も買う相場の方も儲かりそうだということで山勘で買つちやう。本来ならば繭を買ったのだから（糸を）売つとかなければならぬ。そうしておけば相場が下がつても繭の方で損をしても相場で儲けるとか、繭を買つたり、相場も買つたりだから、それが九〇〇円になると損。博打ですね。（原忠三氏談）

相場の決まるのはね、アメリカの景気で決まる。相場が動く、電通から入つてくる。新聞なんかじや遅いだから。製糸屋のお旦那の仕事は情報を取ること。そして仕入れをする、売るとか買うとか。おかみさんは労働力の確保から始まって、家の経済の切り盛り。だからカカア天下になるわけ。財布をがっちり握つていてるのだから。（原忠三氏談）

その家の主人を見ればどつちかと言うと勝負氣があれば、あまりいい糸でない。工業的にやつていれば糸もビチッとしている。糸を見ればその店の亭主が分かっただ。（中沢保男氏談）

（金融は）輸出の関係の方は銀行直接なんですよ。自分の家に倉庫もあるし、銀行もある。国用の製糸屋はだいたい問屋に頼る。利子は計算するとだいたい日歩五錢でしたが、利子を三錢だ、五錢だと計算する製糸屋はいなかつた。だいたい相場ばかりに目が向いていた。お袋が景気はどうですかとよその人と話をしている。アナコンダが安いから駄目だ、スチールが高いなどとばかり言つていた。スチールだアナコンダなんてなんのこんだか分からぬいが、問屋の利子が高いの安いのなんていうことでなく相場に目が行く。諏訪は工業的に考える、甲府は相場を考える。丸茂や大矢島もそれなりに相場をやつたつことでしようね。（原忠三氏談）

界であつた。戦前はアメリカにナショナル生糸、アナコンダ、これは株式ですがね、があつてね、朝六時頃になると、アメリカの情報が入る。アメリカが高いぞ、それ今日は相場が上がるといふことになると、当時は自動車がなくて自転車ですよね、自転車で行つて原料を持っている人のところで商いをした。（中村英雄氏談）

儲けるときの気持いい話、たまらんほどの話。ドイツ軍がねマジノラインを突破した時のことまだ忘れられない。昭和一四年の九月の二日です。その日の横浜の相場が七八〇円くらい、それから毎日上がる。上がり方で言つたて、二〇円、三〇円毎日でしょ。それが暮れの大納会の時、二八日ですがね二四四八円です。七八〇円がですね。それが相場のマジックですね。需要も増えた落下傘へ持つていく、（神奈川県の）厚木の平原町へ持つていく。アメリカでもともとでも買うでしょ。軍備使つたんでしょ。弾薬の袋は絹であった。戦争のときは絹の需要は増える。当時、友人と三人で五〇〇円宛出して、そして、おい儲かるぞ、てわけで買って暮れに、さんざん遊んだ残りが、五万円宛分けた。暮れに、それくらい儲かった。翌八日の発会で今年も儲かるぞなんて言つたら、二〇日頃になつたら一六〇〇円位になつてた。こたえられんようなことがある。相場の夢は忘れられない。ドイツ軍がマジノラインを突破した日にちは、何時になつても忘れられない。死ぬまで一生忘れられない。（原忠三氏談）

この原忠三氏をして今なお「相場の夢は忘れられない」と言わしめる儲けるときの気持いい話に甲府の製糸業界の持つ体質的な特徴が凝縮されているようと思えるのである。原料繭、生糸価格とも、時には連動し、あるいは独立して様々な要因によって日々変動しており、何時、原料繭を購入するか、あるいは出荷するか、そのタイミングの如何によつて利益に大きく影響が出てくるのである。製糸業では生産費の八割までを原料繭代が占め、製糸家はいかに安い原料繭を確保し、生産した生糸をいかに高値で販売するかに腐心し、そこに「相場」が成立し、「投機」が生れたのである。残念なこと

に「相場」のメカニズムは今一つ明確なものとならないが、それはともかく、多くの製糸家は工場、機械、賃金などの設備投資、生産費は最小限度に抑え、手元資金の多くを「相場」に投入したことだけは間違いないようである。それは当然、経営の不安定性に結果する。本稿で明らかになつたように甲府の製糸業者は一般的に言つて中小規模の器械製糸工場が多く、「信用度」が低い脆弱な製糸金融基盤のゆえに、輸出生糸を中心全国水準で見てもトップクラスの「蚕糸王国」を築きあげた諏訪、岡谷地域のような磐石な基礎を築きえなかつた。その要因の一つは「相場」と呼ばれる活動にあつたと考えられる。

諏訪の人は工業的に考えてやる。工業的にものを考て、そしてやつていれば、ああ言う倒産だなんだというのはなかつたでしょ。製糸の世界は日本中同じ、相場師的、勝負師的にやつたから失敗の原因でしょ。だから遊びも派手になる。（原忠三氏談）

（相場を行なつてゐる製糸屋は）そして今度は儲かるからつて前祝をするのね。（中塙美佐子氏談）

岡谷では昭和七年になつて、まだ資力があるうちに、大きな建物もあるし裏もあるから製糸屋が味噌屋になつた。一つ一つが大きいから駄目になつた。信州味噌の味噌屋はみな元は製糸屋ですよ。（原忠三氏談）

（諏訪地方の）金融第八十二（銀行）では戦争の始まるまえから製糸をやつてゐるなら融資をしないぞ、長野では製糸をやめて安定した事業に切り替えろと勧めた。昭和のはじめ頃の教訓を学んだ：（中沢理吉氏談）

## おわりに

は養蚕業と製糸業の関連についての検討は捨象した。

### (2) 石井寛治『日本蚕糸業分析』（東大出版会、一九七二）

ヒヤリング調査は可能な限り文献資料で明らかにした梓組のなかで、文献資料からは絶対に分からぬ、その時代の感触、当事者の感覚をつかむため為されるものである。本稿はかかる基準に立つて、

座談会「甲府市における繭糸業の歩み」の出席者の発言を、昭和戦

前期の甲府市の製糸業の持つ構造およびその特質の一端を明らかにすることをテーマにして再構成を試みたものである。その結果、昭

和初年に存在した製糸業内部の四層構造の析出、甲府の製糸業者の

「相場」をめぐる活動など、先行研究では触れられていない興味深い幾つかの話題を引き出すことに成功した。しかし、例え、出席者の発言から明らかとなつた「出釜」の存在形態、問屋の存在とそ

の機能、さらには「相場」のメカニズムなどまだまだ検討を深めねばならない課題も少なくない。今日に至るも依然として発見され

いない甲府市域での製糸工場の個別経営資料の発見とその分析といふ課題は壁として我々のまえに立ちはだかっている。製糸経営資料の発見と本稿で行なつた昭和初期の分析結果を踏まえて明治から昭和戦前期に至る製糸業の発展過程をトータルに把握し、それを甲府市の近代産業経済の動向のなかに位置付けること、これが残された課題である。他日を期したい。

## 注

(1) 言うまでもないが現在の甲府市域にはかつて農村地帯であつた地域も含まれており、該時期の農家経営にとって養蚕業の持つ意味は決して小さくないことは承知しているが、本稿で

(3) これまで何回か編さんされた『山梨県政史』、『甲府市政史』における養蚕・製糸業に関する記述は断片的であり、まとまつたものとしては山梨県蚕糸業概史刊行会『山梨県蚕糸業概史』（一九五九）のみである。なお『山梨県蚕糸業概史』刊行以後に発表された個別資料分析によらない山梨県の蚕糸業に関する論文の多くは基本的に『山梨県蚕糸業概史』の記述に以拠している。しかし、『山梨県蚕糸業概史』も統計数値や資料の使用については幾つかの問題点を有していると言わねばならない。

(4) 石井寛治氏は『前掲書』の中で全国的な視野から、日本の製糸経営の内部において、主として欧米紡織物業界で絹糸に使用される「優等糸」を生産する「第Ⅰ類型」の製糸業と緯糸用の「普通糸」を生産する「第Ⅱ類型」の製糸業が存在していることを析出することに成功している。筆者も基本的に石井説の「類型」区分を採用したいが、甲府の実態に即した特質の把握のためにはより細かい検討が必要であろうと考えている。

(5) 石井氏も前述の製糸経営の「類型」区分の基準は海外市場での生糸の用途によるものであり、日本の製糸業において国

扱うためとして『前掲書』では国用糸の分析はあえて捨象されている。

は異口同音に「国用製糸」の重要性を強調している。

#### 付 記

- (6) 大正一五年『宮本村統計綴』。
- (7) 大正一四年『甲府市統計書』。
- (8) 本稿を作成するにあたって使用した『山梨県統計書』、『甲府市統計書』などは製糸業の工場数、製造高、販売価格などの数値にかなりの相違がある点は製糸業の把握を行なうにあたって大きな制約となつていて。本稿ではその調整を行なわなかつたが、統計書相互の数値の相違の原因の究明、数值の確定は今後の課題としておきたい。
- (9) 甲府商工会議所『甲府市況』二八三号（昭和八年一〇月）に「国用生糸振興座談会」記事が掲載されているが、出席者

座談会にご出席頂いたのはかつて実際に製糸業に従事されたり、製糸業の周辺にあって甲府の製糸業の歩みを見聞されてこられた中村英雄、小田切彰、中沢理吉、三井金三、中沢保男、中塙美佐子、原忠三（順不動）の諸氏である。長時間に亘り近・現代専門部会専門委員の様々な質問に丁寧に答えていた皆様に末筆ながら深く感謝申し上げます。なお、まことに残念なことながら出席者の一人、小田切彰氏は昨秋他界された、心からご冥福をお祈り申し上げます。

（市史編さん専門委員）